

# サッカー初心者の学習指導に関する基礎的研究

## —2・4年生児童を対象にしたドリブルからとリフティングからの指導について—

Basic research on soccer instruction methods for 2 and 4 graders  
of elementary school children-

山崎 有希（兵庫教育大学大学院）：

Yuuki YAMASAKI : Graduate School, Hyogo University of Teacher Education,

芹澤 博一（兵庫教育大学大学院）：

Hirokazu SERIZAWA : Graduate School, Hyogo University of Teacher Education,

下田 新（兵庫教育大学大学院）：

Arata SHIMODA : Graduate School, Hyogo University of Teacher Education,

後藤 幸弘（兵庫教育大学）：

Yukihiro GOTO : Hyogo University of Teacher Education,

サッカーで使われている種々の個人技能（キック、トラップ、ドリブル等）は、ボールに衝撃を加える身体部位や加えられる力の程度（加減）、ならびに方向を変化させた「キック」と捉えることができる。また、サッカーで最も使用頻度が高いキックは、インサイドキックとインステップキックである。

さらに、ドリブルとリフティングはキックの方向は異なるが、いずれも自分への弱いキックの連続と捉えられ、本質的には同質のものである。したがって、中学生、成人では、リフティングの上手な者はドリブルも上手であることが報告されている。また、児童期はパワフルなキックよりもスキルフルなキックを習得させる時期でもある。しかし、このいずれから指導した方が良いかについては明らかにされていない。そこで、本研究は、2・4年生の児童を対象に、サッカーの学習をドリブルから先に行うDGと、リフティングから先に行うLGの2群を設定し、11時間の学習による成果を比較、検討した。

その結果、学習効果は2年生よりも4年生の方が高く、サッカー学習の適時期は4年生にあると考えられた。また、2年生、4年生ともに、個人的技能はリフティングから学習させた方が良いと考えられ、ゲームは、ドリブルから学習させた方が良いと考えられた。そして、ドリブル技能とリフティング技能の転移の可能性は4年生のみで認められ、転移の方向は、ドリブルからリフティングよりも、リフティングからドリブルへの可能性の高いことが示唆された。

**キーワード：サッカー、ドリブル、リフティング、初心者児童、指導順序**

### I. 緒言

サッカーは、状況判断能力、技術、体力、社会性、等々を高めるのに有効な教材であると考えられる。したがってサッカーは、戦後の学習指導要領等において一貫して取り上げられてきた<sup>10) 11) 12) 13) 14) 15) 16)</sup>。

また、サッカーで使われている種々の個人技術（キック、トラップ、ドリブル等）は、ボールに衝撃を加える身体部位や加える力の程度（加減）、ならびに方向を変化させた「キック」と捉えられることができる<sup>3)</sup>。例えば、ヘディングは頭でのキック、

ボールを止めるトラップはボールにマイナスの力を加えるキックといえる。

弱いキックの連続である8の字ドリブルとキック距離の発達過程を追跡した研究<sup>7)</sup>によると、後者は、小学校、中学校、高校のいずれの学年段階から始めても、高校3年生の段階では同程度のパフォーマンスを示すようになるが、前者は、高校から始めた生徒の成績は、小学校から始めた児童の成績におよばないことが報告されている。このことは、ドリブルは低年齢から練習を開始することの大切さを示唆している。また、キック距離には、技術的要因よ

りも体力的要因の影響の大きいことを示唆している。すなわち、それぞれの技術には学習開始の適時期<sup>注1)</sup>のあることを示唆している。

これらのことは、児童期に弱いキックの連続であるリフティングあるいはドリブルによる練習でボールインパクトの感覚を学習させておくことが重要であることを示唆している。

また、インステップによるリフティングは、インステップキックを学習させるのに、ドリブルはサイドキックを学ばせるのにふさわしいと考えられる。このドリブルとリフティングは、いずれも自分へのパスと言え、キックの方向は異なるが本質的には同質のものであると捉えられる<sup>4)</sup>。事実、中学生ではリフティング能力とドリブル能力の間には、高い相関関係のあることが明らかにされている<sup>4)</sup>。

しかし、いずれの技術から学習させるのがよいかについては、明らかにされていない。

また、キック技能の発達過程の変化から、キック学習の適時期は9歳以下から13歳頃までにあるとする報告がある<sup>1) 2)</sup>。また、キック動作学習の可能性は、バントキックができるようになる6歳頃からであるとしている<sup>2)</sup>。

さらに、攻防相乱型シュートゲームの学習は、低学年の児童では困難であるとされている<sup>6)</sup>。

以上のことから、本研究では、本質的に同じものと捉えられるドリブルとリフティングのいずれから学習させるのが良いかを明らかにしようとした。すなわち、ドリブルとリフティングとそれらを用いた課題ゲームからなる指導過程を低・中学年児童の初心者を対象に適用し、個人的技能とゲーム様相の変化から、ドリブルとリフティング学習の順序性を検討した。

## II. 方法

### 1. 対象

2年生児童35名（男：14，女：21）と、4年生児童36名（男：18，女：18）を対象とした。

これらの児童をドリブルから学習する群（以下、DGと略す）と、リフティングから学習する群（以下、LGと略す）に分けた。なお2群は、8の字ドリブル、リフティングの成績を基に、松本らの作成した評価基準表<sup>9)</sup>（表1）に基づき、グループ内異質、グループ間等質になるように分けた。

表2に、被検者の身体的特性等を一覧で示した。

### 2. 実践時期と学習計画

実践は平成19年5月中旬から6月中旬に行った。

表3は、11時間からなる学習計画の概要を示している。

45分の授業時間の中で、ドリル練習（8の字ドリブル図2・リフティング）を20分、図1に示す課題ゲーム（2ゴールドリブルサッカー・サッカーテニス）または、ミニゲームを20分行わせることを基本とした<sup>注2)</sup>。

表1. 個人技能レベルの評価基準

段階点	8の字ドリブル (点)	リフティング (回)	合計点
5	22～	36～	9～10
4	17～21	20～35	7～8
3	12～16	11～19	5～6
2	7～11	6～10	3～4
1	～6	～5	1～2

また、指導者による影響を等しくするため、それぞれの群は、2人の教師で毎時交互に指導した。1人は、クラス担任の男性教師（2年：指導歴25年，4年：指導歴24年），もう1人はサッカー歴18年の著者の1人（C級コーチ）である。

8の字ドリブルとリフティングは、後述する学習効果の判定と同様の方法で、2人1組で練習させ、1人が記録を測定するようにさせた。

また、図1（A）に示す2ゴールドリブルサッカーは松本・後藤によって開発された課題ゲーム<sup>9)</sup>で、同（B）に示すサッカーテニスは、著者らが考案したものである。これらは、以下の条件で行われた。

表2. 被検者の身体的等一覧

学年	群	人数 (人)	身長 (cm)	体重 (kg)	8の字ドリブル (点)	リフティング (回)
2年生	DG	男: 8 女: 9	男: 124.9±6.2 女: 123.0±4.4 全体: 123.9±5.2	男: 27.5±7.5 女: 24.7±3.6 全体: 26.1±5.4	男: 8.4±3.6 女: 6.7±2.7 全体: 7.6±3.1	男: 3.6±2.2 女: 2.8±1.9 全体: 3.2±2.0
	LG	男: 6 女: 12	男: 121.5±4.2 女: 118.5±5.7 全体: 120.0±5.3	男: 24.6±4.7 女: 23.1±3.7 全体: 23.9±4.5	男: 7.6±2.5 女: 7.2±1.4 全体: 7.4±2.0	男: 6.9±3.3 女: 3.2±2.6 全体: 5.1±3.5
4年生	DG	男: 9 女: 10	男: 137.2±4.6 女: 130.1±4.9 全体: 133.7±6.1	男: 28.0±4.2 女: 50.4±2.7 全体: 39.8±3.6	男: 14.8±6.5 女: 6.9±2.6 全体: 10.9±6.2	男: 18.2±25.2 女: 4.3±2.5 全体: 11.3±2.4
	LG	男: 9 女: 8	男: 134.7±7.1 女: 133.5±6.1 全体: 134.1±6.9	男: 28.1±3.7 女: 31.3±8.8 全体: 29.7±6.8	男: 11.9±6.6 女: 9.0±2.2 全体: 10.5±5.3	男: 21.4±35.2 女: 6.5±4.6 全体: 13.9±26.9

表3. 学習計画の概要

群	ドリブル群	リフティング群
日		
8の字ドリブルとリフティングの測定		
Pre	両群対抗戦のゲーム大会 (ミニゲーム)	
2	8の字ドリブル: 20分	リフティング: 20分
5	2ゴールドリブル	サッカーテニス
7	サッカー (3時間目はミニゲーム) 20分	(3時間目はミニゲーム) 20分
Mid	両群対抗戦のゲーム大会 (ミニゲーム) 個人技能の測定 (8の字ドリブル、リフティング等)	
9	リフティング: 20分	8の字ドリブル: 20分
10	サッカーテニス: 20分	2ゴールドリブル サッカー: 20分
post	両群対抗戦のゲーム大会 (ミニゲーム) 個人技能の測定 (8の字ドリブル、リフティング等)	

[2ゴールドリブルサッカー]

- ・1対1でそれぞれ2つある自分のゴールのいずれかにドリブルでボールを持ち込めば得点となるゲーム。
- ・得点したら中央から得点された方のボールで再開。
- ・コートの外にボールが出たら、出たところから、相手のドリブルで再開。

[サッカーテニス]

- ・ワンバウンドまたはノーバウンドでボールを相手コートに返すゲーム。

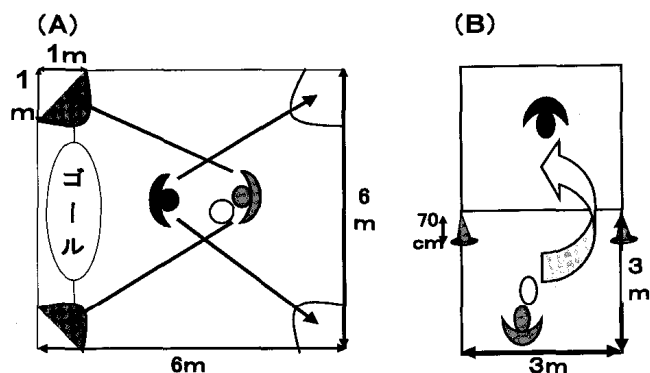


図1. 課題ゲームのコート条件

(A): 2ゴールドリブルサッカー, (B): サッカーテニス

- ・相手が返球できなかつたら、失点。
- ・サーブはパントキックで行う。

3. 学習効果の判定項目と測定方法

(1) 個人的技能の測定について

1) 8の字ドリブル

図2に示すように、3m間隔に置いた2つのコーンの間を、30秒間で8の字に回れる回数を、4分の1回転を1点として得点化し評価した。すなわち、8の字を1回転すれば4点となる。なお、試技は2回とし、記録の良い方を成績とした。このとき、使用する足の部分はインサイドのみとした。

2) リフティング

ワンバウンドさせても良い条件でのインステップによるリフティング連続回数を測定した。試技時間は2分とし、時間内の最高連続回数を成績とした。

なお、試技は2回とし、記録の良い方を成績とした。

3) サイドならびにインステップキックの正確性

静止したボールを10m離れた地点に設置したハードル(100×44cm)にサイドキックとインステップキックでそれぞれ10本蹴らせ、ハードルの下を通過した本数を成績とした。

(2) ゲーム様相(集団的技能)について

縦35m、横25mのコート条件で、10分間の5対5のミニゲームを単元前・中・後に行わせ、その際のゲーム様相をVTRに収録した。集団的技能は、下記の指標6)を用いて把握した。

1) 攻撃完了率＝

$$\text{シュート数} / \text{ボール獲得数} \times 100$$

2) 連携シュート率＝

$$\text{シュートに至るまでにパスが用いられたシュート数} / \text{ボール獲得数} \times 100$$

3) ゲームパフォーマンスレベル(GPL)

ゲームにおける、それぞれの子どものGPLを後藤ら<sup>4)</sup>の作成した表4に示す基準表に基づいて評価した。

評価者は、(財)日本サッカー協会B級コーチ1名、C級コーチ1名の2名で、評価が異なったときは、平均値を成績とした。なお、測定前に2名の一致度を80%以上になるまで練習させた。

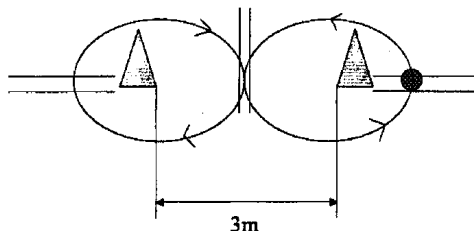


図2. 8の字ドリブルの測定の場の条件

(3) 統計処理

両群間、学年間の各測定項目の平均値の差の検定は、対応のないt-testを用い、単元前・中・後における各測定項目の平均値の差の検定には、対応のあるt-testを用いた。なお、統計処理の有意性は危険率10%未満で判定した。

表4. ゲームパフォーマンスレベル(GPL)の判定基準(後藤・高橋 2005)

GPL	基準	
1段階	フレイシャーの途中	プレーに意図が読み取れない
2段階		少し意図通りプレーができる
3段階		かなり意図通りプレーができる
4段階		ほとんど意図通りプレーができる
5段階	フレイシャーのないうち	意図通りプレーができない
6段階		少し意図通りプレーができる
7段階		かなり意図通りプレーができる
8段階		ほとんど意図通りプレーができる
9段階		すべてのプレーが正確である

Ⅲ. 結果ならびに考察

1. 個人的技能

図3の(A)は8の字ドリブル、(B)はリフティング、(C)はサイドキックの正確性、ならびに(D)はインステップキックの正確性の単元経過に伴う変化を示している。また、■で2年生を、▲で4年生を示し、DGは実線で、LGは点線で示した。

1) 8の字ドリブル

2年生では、両群ともにドリブルを練習した直後の成績は向上した。また、両群の単元後の成績は、ほぼ同値を示した。

4年生では、両群ともに単元経過に伴い向上した。また、単元前は、LGよりも低値だったDGが単元中・後では、LGよりも高値を示した。

2) リフティング

2年生のDGは、単元前半に有意に向上し、単元後半には若干低下がみられた。一方LGは、単元を通して向上したが、標準偏差値は単元経過に伴い大きくなる傾向がみられた。このことは、顕著に上手になった児童とそうでない児童が混在していることを示している。

4年生は、両群ともに単元経過に伴い有意に向上し、いずれの時期においても、LGの方が高値を示した。

3) サイドキックの正確性

2年生のDGは単元前に最も高値を示し、ドリブルの学習を重ねると成績が低下した。また、単元後の成績はLGよりも低値を示すという予想に反する結果となった。一方、LGは、単元前後で有意に向上した。

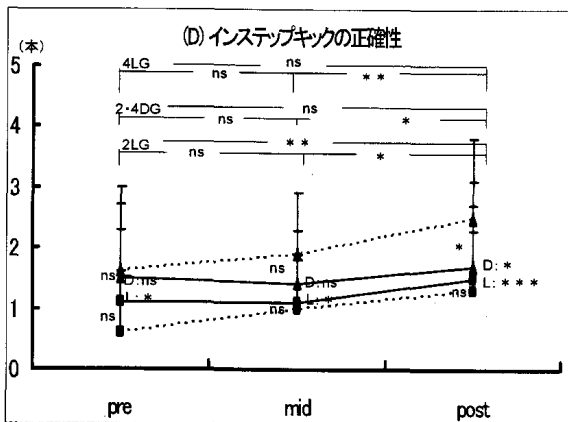
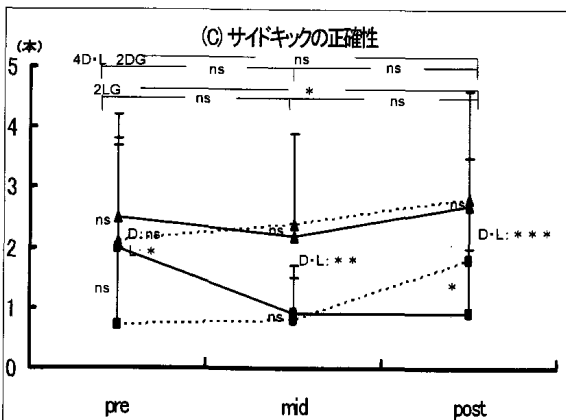
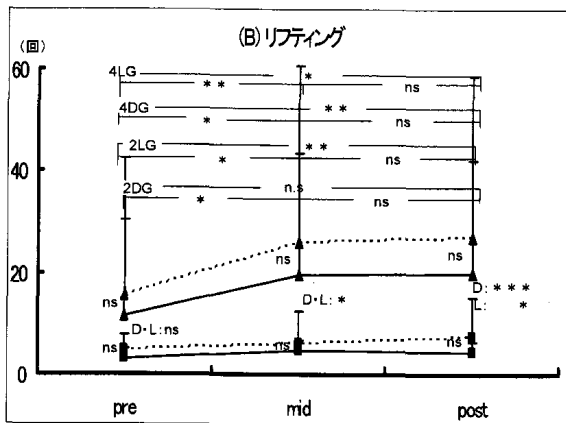
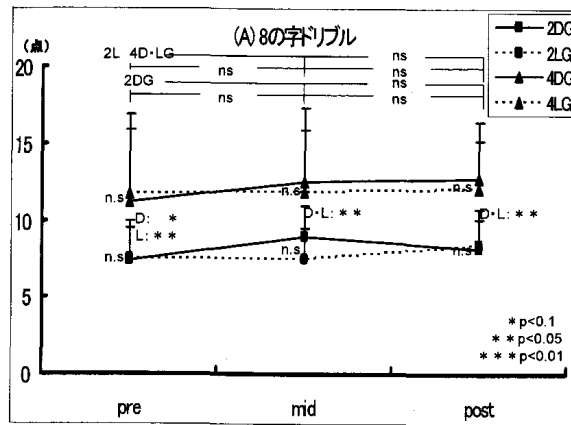


図3. 個人的技能の学習による変化

4年生のDGも2年生と同様に単元前半は低下し、単元後半で回復がみられた。LGでは、単元経過に伴い僅かに向上した。また、単元前、若干低値だったLGが、単元後には、DGと同値を示した。

両学年ともにDGのサイドキックの成績が低下した理由は、ドリブルは、身体(軸足)の前方でボールを操作するので、キックに必要なバックスイングが身につかなかったこと、また本実践ではドリブルの中心機能と考えられる「方向を変える」ことを学習させるドリブルや課題ゲームを用いた影響も推察された。これらのことは、単元中・後の測定時に、ハードルに向かって蹴り足の反対側に外す失敗の多い傾向のあることが観察されたことから伺われた。一方、LGがドリブルの練習後に成績が低下しなかったのは、ドリブルの練習時間が短いことや、リフティングの練習を先に行ったので、バックスイングが身についた上でドリブルを学習したことの影響が推察された。

#### 4) インステップキックの正確性

2年生のDGは単元前半に若干低下したが、リフティング学習後には有意に向上した。一方、LGは単元を通して向上した。しかし、単元後の成績は両群ほぼ同値を示した。

4年生のDGは、サイドキックと同様に単元前半に低下し、後半には回復がみられた。一方、LGは、単元前後で有意に向上した。また、両群の単元前の成績はほぼ同値であったが、単元後にはLGの方が有意に高値を示した。

以上、8の字ドリブル、リフティング、サイド・インステップキックの正確性の個人的技能を総合評価すると、両学年ともに、DGよりもLGの方が上手になっていると判定された。

## 2. 集団的技能

図4の(A)は攻撃完了率、(B)は連携シュート率、(C)はゲームパフォーマンスレベルの単元経過に伴う変化を示している。

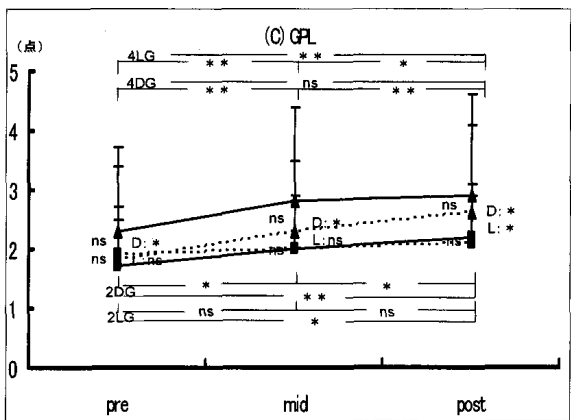
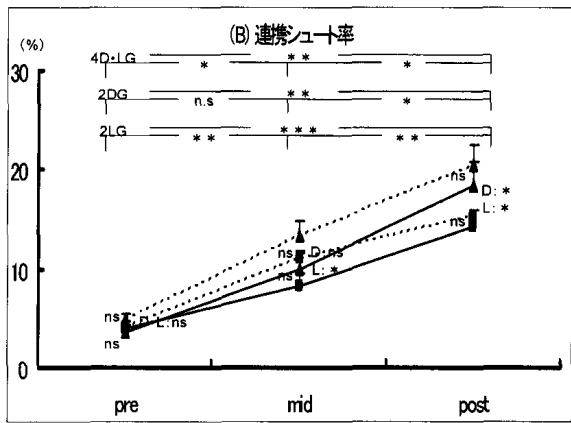
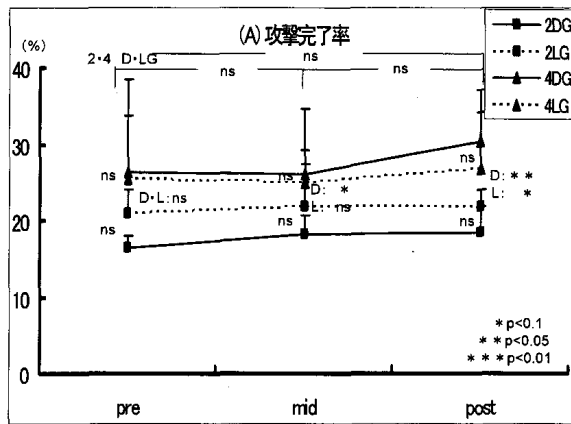


図4. 集団的技術の学習による変化

また表5は、両学年の勝敗の単元経過に伴う変化を示している。

1) 攻撃完了率

2年生のLGは単元経過に伴う変化はみられなかった。しかしDGは、LGよりも、低値ではあるが向上傾向を示した。

4年生では、単元前・中の成績は、両群ほぼ同値であったが、単元後にはDGが高値を示し、LGよりもDGの方が獲得したボールをシュートに結びつけられるようになっていた。

2) 連携シュート率

両学年、両群ともに、単元経過に伴い有意に向上し、いずれの時期においてもLGの方が若干高値を示した。

3) ゲームパフォーマンスレベル

2年生は、単元前にLGよりも低値であったDGが、単元後にはLGよりも若干高値を示した。

4年生では、両群ともに単元経過に伴い向上し、いずれの時期においても、DGの方が高値を示した。

4) 勝敗

2年生では、単元前半はDGの2敗1分から1勝2分に変化し、勝ち点は、1から5へと増加した。一方、LGは、単元前半は成績が低下したが、単元後半は、勝敗、勝ち点ともに向上した。すなわち、両群ともにドリブル学習後の成績が向上する傾向が認められた。

4年生も、2年生と同様に、勝敗、勝ち点は、両群ともにドリブルを練習した直後のゲームでよくなっている傾向が認められた。

表5. ゲームの勝敗の単元経過による変化

(A) 2年生

	pre		mid		post			
	DG	Vs. LG	DG	Vs. LG	DG	Vs. LG		
A	0-1	イ	A	1-1	イ	A	1-1	イ
B	0-2	ロ	B	2-2	ロ	B	1-2	ロ
C	1-1	ハ	C	1-0	ハ	C	2-1	ハ
total	1-4		4-3		4-4			
勝ち点	1-7		5-2		4-4			
DGから	2敗1分		1勝2分		1勝1敗1分			

(B) 4年生

	pre		mid		post			
	DG	Vs. LG	DG	Vs. LG	DG	Vs. LG		
A	5-1	イ	A	1-0	イ	A	1-1	イ
B	0-1	ロ	B	0-0	ロ	B	0-2	ロ
C	1-1	ハ	C	0-0	ハ	C	1-0	ハ
total	6-3		1-3		2-3			
勝ち点	4-4		5-2		4-4			
DGから	2勝1敗		1勝2分		1勝1敗1分			

以上、集団的技術については、2年生では、連携シュート率を除くすべての項目で、DGが優れていると評価された。また、4年生では、連携シュート率、ゲームパフォーマンスレベルは甲乙つけ難く、攻撃完了率、勝敗はDGの方が優れていると評価さ

れた。

よって両学年とも、ゲームはLGよりもDGの方が上手になっていると判定された。

### 3. ドリブルとリフティング能力の関係

図5の上段は2年生、下段は4年生の単元前、中、ならびに後の8の字ドリブルとリフティングの成績の関係を示したものである。

2年生では、いずれの時期においても、両群ともに両技術の間には、有意な相関関係は認められなかった。また、単元経過に伴う相関係数の変化も認められなかった。すなわち、2年生では、中学生や成人を対象とした先行研究<sup>4)</sup>とは異なる結果を示した。このことは、若年者では技能の転移の可能性が低いことを示唆していると考えられた。

一方4年生では、(B)のDGのmidを除くいずれの時期においても、両群ともに両技術の間には1%水準で有意な相関関係のあることが認められた。

すなわち、4年生では、2年生とは異なり、8の字ドリブルが上手な子はリフティングも上手である、また、リフティングが上手な子はドリブルも上手であるという関係性が先行研究と同様に認められた<sup>4)</sup>。

このことは、4年生ではドリブルとリフティング能力の間に転移の可能性のあることを示唆している。

### 4. 技能転移の方向性の検討

ここでは、2年生(A)ならびに4年生(B)で、純粋にドリブルかリフティングのどちらかの技術のみを練習した状況である単元前と中での両技術の伸びの相関関係を検討した(図6)。なお、DGの成績は、◆で示し、両者の回帰直線は実線で示した。一方、LGの成績は、■で示し、両者の回帰直線は点線で示した。

2年生では両群ともに有意な相関関係は認められなかったが、DG( $r=0.12$ )よりもLG( $r=0.39$ )の方が相関係数は高かった。

また、4年生では、LGにおいてのみ、10%水準で有意な相関関係( $r=0.42$ )が得られた。

つまり、ドリブルを学習したDGよりも、リフティングを学習したLGの方が、ドリブルとリフティングの技術の伸びの相関関係は強かった。このことは、ドリブルからリフティングよりも、リフティングからドリブルへの転移の可能性が高いと考えられた。

### 5. 学年差

図7は、両学年の各判定項目の伸び率を示したものである。

8の字ドリブルは、学年・群間差はみられなかった。リフティングは、2年生よりも4年生の方が、いずれの群も高値を示した。サイドキック、インステップキックの正確性は、2年生のLGが最も高い伸び率を示したが、学年差に一定の傾向は認められず、DGは4年生の方が、LGは2年生の方が高い伸び率を示した。

攻撃完了率、連携シュート率、ゲームパフォーマンスレベルのいずれにおいても両群ともに2年生より、4年生の方が高い伸び率を示した。また、連携シュート率は4年生のDGが、ゲームパフォーマンスレベルについては4年生のLGが最も高値を示した。

すなわち、個人的技能と集団的技能の学習効果の学年差を比較した結果、4年生の方が学習効果は高かった。これらのことは、先行研究<sup>6)</sup>と同様に、サッカー学習の適時性は2年生よりも4年生の方が高いことを示している。

表6は、単元終了後の学習成果を両群間、ならびに学年間を比較した結果をまとめて示したものである。なお、グループ間については不等号で、有意差が認められたものについては※を付記し、学年差については太字で、有意差が認められたものは網かけで示した。

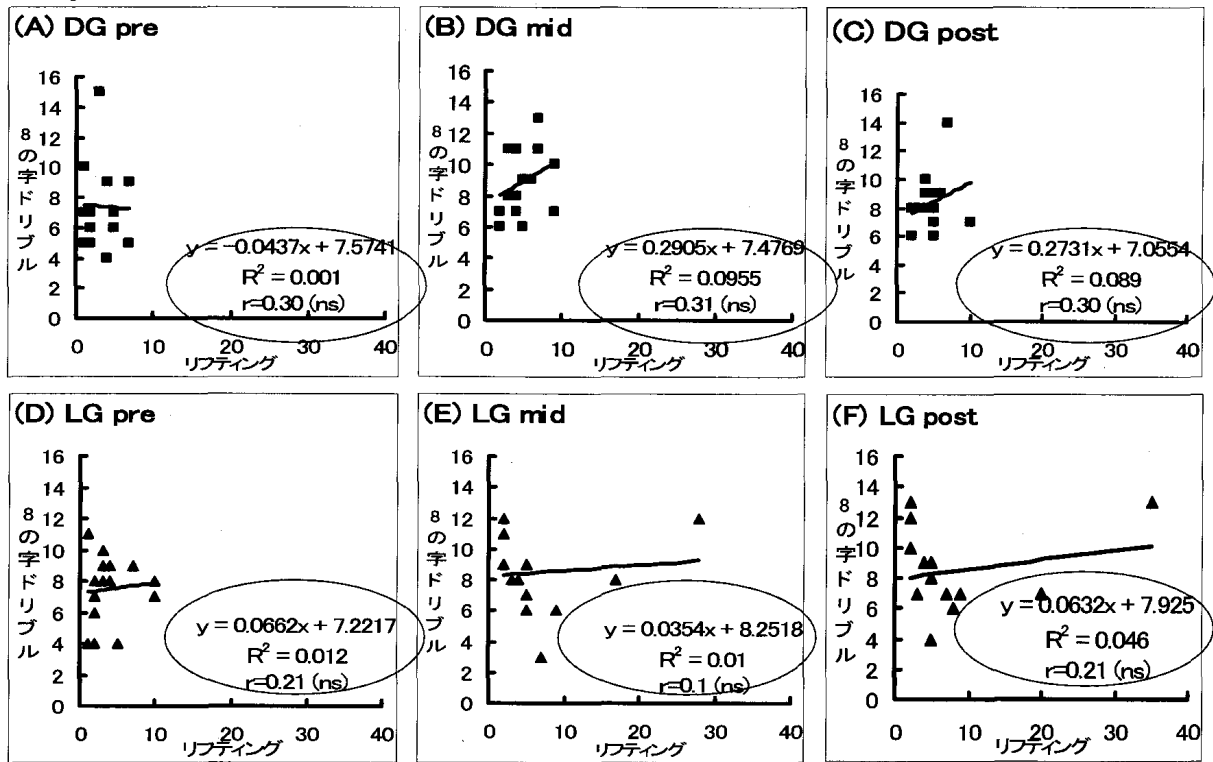
これらの結果から、個人的技能を上達させるためには、両学年ともリフティングを練習した方がよいと考えられ、ゲームを上手にさせるためには、両学年ともドリブルから学習させた方がよいと考えられた。しかし、これにはDGのサイドキックの成績が向上したことが大きく影響していた。すなわち、ドリブルの方向を変える練習は、サイドキックの正確性を向上させるのに機能しなかったことによるものであった。

また、転移の可能性は4年生の方が高く、その方向はリフティングからドリブルへの可能性が高いと考えられた。

転移は、課題の運動的要素の変化が単純な課題であれば、難しい課題から容易な課題への転移が大きいことが先行研究<sup>8) 17)</sup>から示されている。したがって、ドリブルよりもリフティングの方が難しい技術であるといえる。

また、個人的技能はリフティングから、ゲームを上手にさせるためには、ドリブルから学習させた方がよいという結果と、転移の方向を合わせてみると、

## 2年生



## 4年生

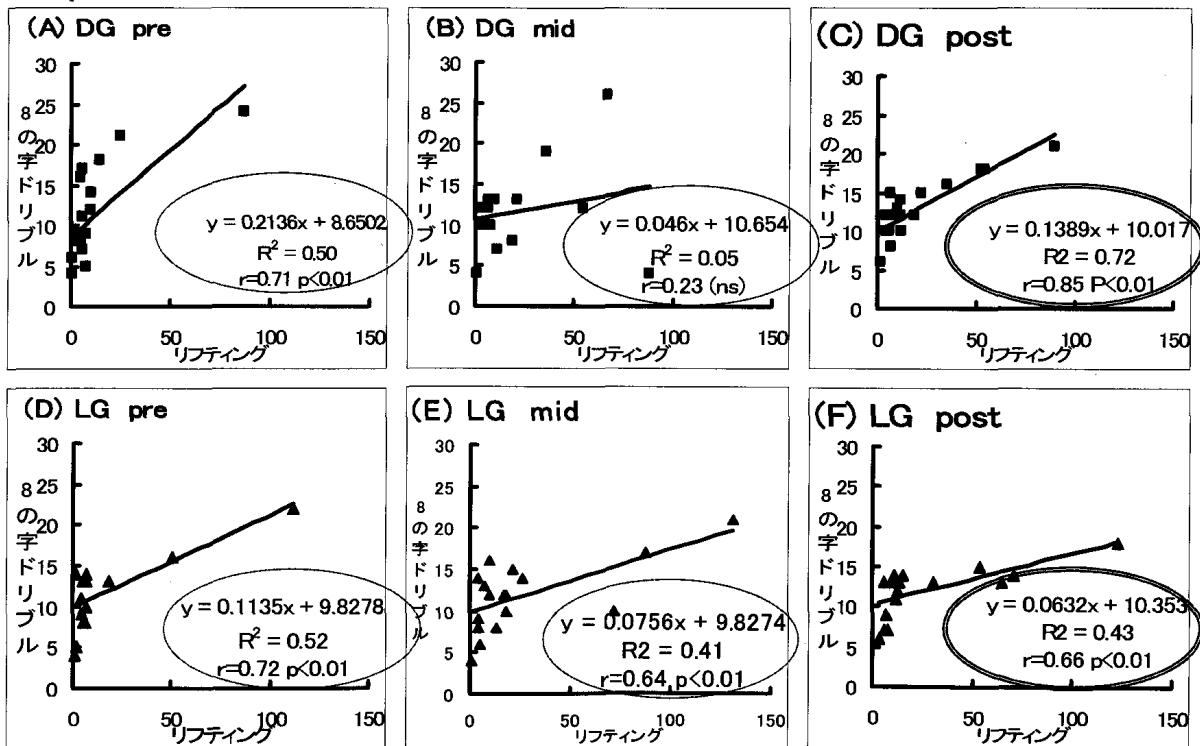


図5. 8の字ドリブルとリフティングの能力の関係

注) 点線で囲んである円は有意でないことを示し、実践で囲んである円は1%水準で有意であるものを、さらに、二重丸は相関係数が最も大きかったものを示している。



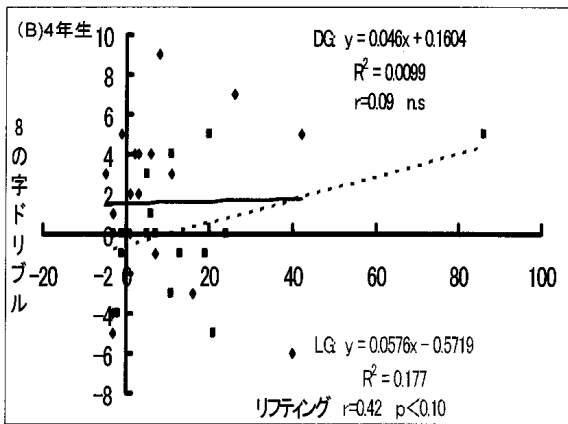
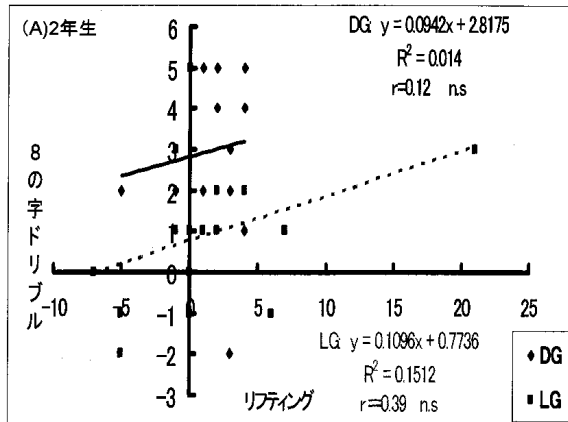


図6. ドリブルとリフティングの成績の関係

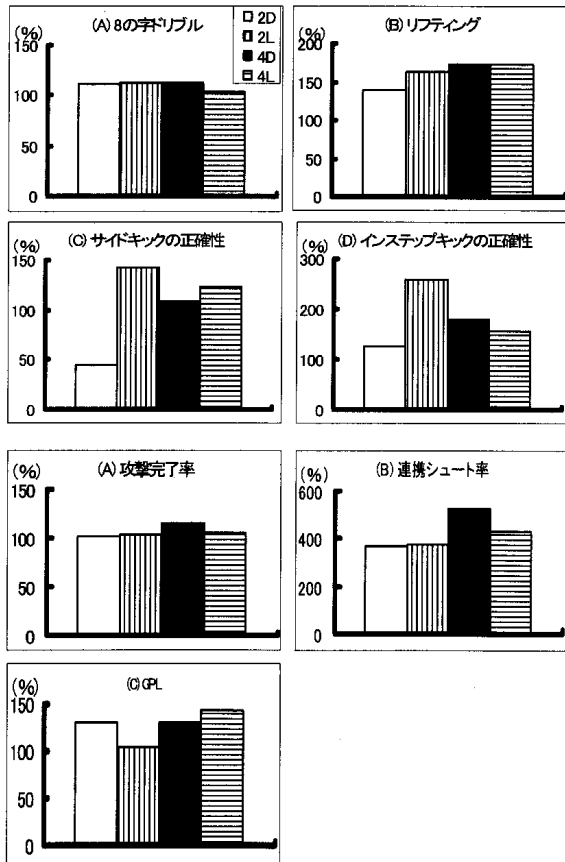


図7. 各技能の伸び率の比較 (学年・群間)

表6. 学習効果のまとめ

測定項目		学年	
		2年生	4年生
個人的技能	8の字ドリブル	D = L	
	リフティング	D < L	
	サイドキック	D < L ※	
	インステップキック	D < L	
	総合	D < L	D < L
集団的技能	勝敗	D > L	D > L
	攻撃完了率	D > L	
	連携シュート率	D = L	
	GPL	D > L	
	総合	D > L	D > L
総総合		D ≥ L	D > L

一見矛盾しているように考えられる。しかし、ゲーム場面から離れて身に付けた個人技能は、ゲームで生きて働くものにはなりにくい<sup>5)</sup>。DGの方が、ゲームが上手になったのは、本実践では、ドリブルの中心機能と考えられる「方向を変える」ことを学習させるドリルと課題ゲームを用いたことが、相手をおろすゲームで生きて働く技能として身に付いたからであると推察された。

#### IV.まとめ

本研究では、2・4年生の児童を対象に、サッカーの学習をドリブルとリフティングのいずれから学習させた方が良いかの順序性を検討した。

- 1) 2年生、4年生ともに、個人的技能を伸ばすには、リフティングから学習させた方が良いと考えられた。一方、ゲームを上手にさせるためには、ドリブルから学習させた方が良いと考えられた。
- 2) 個人的技能や集団的技能の学習効果は、2年生よりも4年生の方が高く、サッカー学習の適時性は4年生の方が高いと考えられた。
- 3) ドリブル技能とリフティング技能の転移の可能性は4年生のみで認められた。また、その方向は、リフティングからドリブルへの可能性の高いことが示唆された。

(注)

注1) 適時期：個々の課題(運動)に対する学習者の内的状態が、それを学習するのに最も適した状態になっており、学習効果が最も大きく出現する期間をいう。また、個々の運動に対する内的状態がそれを学習するのに最も適した状態になっている時に適時性があるという<sup>18)</sup>。

注2) 運動強度について：ドリル練習，課題ゲーム

を行う際の運動強度を心拍数の変化から検討した。その結果、技能の未発達な児童では8の字ドリブルとリフティング、2ゴールドリブルサッカーとサッカーテニスの運動強度では同程度であると予備実験で確かめられている。

#### 文 献

- 1) 後藤幸弘・辻野昭・田中譲 (1975) インステップ・キックにおけるボール速度と正確性の発達について。大阪市立大学保健体育学研究紀要, 10 : 67-75.
- 2) 後藤幸弘 (1987) 幼少児のキック動作の発達過程についての筋電図的研究, 兵庫教育大学研究紀要, 7 : 187-207.
- 3) 後藤幸弘 (1994) 授業に役立つバイオメカにク「ボールを蹴る」, 学校体育47-13, 72-74.
- 4) 後藤幸弘・高橋潤・長井功 (2005) サッカーのリフティング能力と個人技能, ゲームパフォーマンスならびに楽しさの関係—中学生男子を対象として—, 兵庫教育大学研究紀要, 26 : 125-137.
- 5) 後藤幸弘・古賀秀和・松本靖 (2006) 「課題ゲームを中心とするバスケットボールの特性に触れる学習過程—高学年児童を対象として—, 兵庫教育大学研究紀要, 28 : 137-151.
- 6) 林修・後藤幸弘 (1995) ゲーム領域における教材 (学習課題) 配列に関する事例的検討—攻防分離型から攻防相乱型への移行・発展の有効性—。第2回スポーツ教育つくば国際研究集会報告書, 55-66.
- 7) 岩村英吉ら (1979) サッカートレーニングの開始年齢, 昭和53年度 ヤング・フットボーラーに関する調査報告書, 14-22.
- 8) 松田岩男 (1967) 運動学習の転移, 体育の科学, 17 (6) : 334-337
- 9) 松本靖・後藤幸弘 (2007) 戦術の系統に基づいて考案されたサッカー「課題ゲーム」の学習の有効性—高学年児童を対象として—, スポーツ教育学研究, 26 (2) : 89-103.
- 10) 文部省 (1947) 学校体育指導要領, pp. 8, 東京書籍 : 東京.
- 11) 文部省 (1949) 学習指導要領小学校体育編, pp. 88, 東京書籍 : 東京.
- 12) 文部省 (1953) 小学校学習指導要領体育科編, pp. 143, 明治図書出版 : 東京.
- 13) 文部省 (1968) 小学校学習指導要領, pp. 185, 文部省印刷局 : 東京.
- 14) 文部省 (1977) 小学校学習指導要領, pp. 96,

文部省印刷局 : 東京.

15) 文部省 (1989) 小学校学習指導要領, pp. 102, 文部省印刷局 : 東京.

16) 永島正俊 (1994) サッカーの特性と技術構造, 体育科教育, 42 (7) : 15-18.

17) 岡村豊太郎・山本勝昭 (1978) 運動学習の特性と転移の条件, 新体育, 48 (5) : 346-351.

18) (社) 日本体育学会監修 (2006) スポーツ科学辞典, pp. 117a.